

そのものの中で器種差を検討することも必要もある。

さて、出土した土器の中で、器形が円筒形とはならない土器が存在していることは注目される。本発掘調査では、第5層から1点の出土である(Fig.30,23)。この土器の口縁部形態を見ると、断面三角形ではねあげ状に口縁部外面を上方に突出させる形である。この特徴は岩本式土器の口縁部形態そのものであるが、岩本式土器に見られるような口唇部の刻みや口縁部外面の貝殻腹縁部による刺突文などは施されず、器面の貝殻条痕はナデ消されずによく残っている。

前平式土器へとつづく貝殻条痕を顕著に残す土器の出現の問題に関して、岩本式土器の段階で出現したとする考え方を今回の調査成果では補強するが、その考え方の中でも、貝殻条痕を残す土器が独自に出現したものなのか、ないしは条痕文土器などとの影響・被影響の関係にあるのかを議論できる可能性を有していると考えられることから注意しておきたい。

今回は、全体器形や、所属層位が岩本式土器、前平式土器の両方を包含する土層からの出土であるため、この問題に対して解決となるべきものはない。しかし少なくとも円筒形という形を有する土器様式の中にあって、全く異なる器形を有する土器の存在とそこに付加されている貝殻条痕の存在は、現在問題視されている貝殻条痕文の出現の問題という背景の中で、内因的な解釈だけではなく様式外の地域との関連を考えるべきとする外因的な解釈の可能性も棄却できない。

(文責 下山)

#### <参考文献>

- 長野真一・中島哲郎 編 1978 「岩本遺跡」指宿市教育委員会  
長野真一 1979 『まとめ』「岩本遺跡」指宿市教育委員会  
新東晃一 1988 『南九州の円筒土器と角筒土器－前平式土器と吉田式土器の型式概念をめぐる諸問題－』「鎌木義昌先生古希記念論文集・考古学と関連科学」  
下山覚・鎌田洋昭 1999 『水迫式土器の設定－南部九州の隆帶文土器から貝殻文系円筒形土器への土器型式の変化について－』「ドキどき縄文さきがけ展図録」指宿市考古博物館・時遊館COCCOはしむれ、指宿市教育委員会

#### 第3節 南九州における縄文時代早期の磨製技術について

岩本遺跡第6～7層出土の磨製技術に関する資料は、砥石3点、磨製石斧の刃部片と考えられる磨面をもつ剥片2点である。また、今回の発掘調査では出土していないが、昭和52年度の岩本遺跡の発掘調査では、磨製石鎌、磨製石槍、磨製石斧、鋸歯状の切り込みをもつ磨製石器が出土している<sup>(1)</sup>。このことから、南九州の縄文時代早期初頭の岩本式土器段階においては、磨製石器の器種が多種であり、磨製石器と磨製技術の定着や完成度の高さが看取できる。

研磨痕あるいは磨面をもつ石器類の磨石・石皿・台石は、多くの遺跡でその出土例が認められが、いわゆる食料加工石器としてその用途・器能が想定されている。しかしながら、これまでの発掘調査では、これら磨製石器類を研磨したと認定された石器（砥石）の出土例はなかった<sup>(2)</sup>。このことから、岩本遺跡で出土した砥石は、南九州において縄文時代早期初頭（前平式土器が2点出土しているが岩本式土器が主体を占める）のものとしては初例であると考えられる<sup>(3)</sup>。また、縄文時代早期前半期の指宿市小牧3A遺跡において、加栗山遺跡出土の加栗山IV類土器が主体を占める遺物包含層から砥石が出土している<sup>(4)</sup>。

中摩氏の砥石個別の観察によると、3点の砥石の断面形態は概ね三角形を呈し、研磨面は平坦、凸面、凹面が認められることがある。特に、凹面の断面形態は緩やかな円弧状を呈しているところで、磨製石斧の研磨を目的としたものと想定している。筆者もその所見には賛同でき、砥石に関連すると考えられる磨製石斧や磨面のある剥片と比較しながら検討してみる。

砥石の緩やかな円弧状の断面をもつ研磨面の幅は、No.43はA：7.1cm（直径8.2cm）、No.44はB：6.5cm（直径11.6cm）、K上部：6cm（直径11.6cm）、K下部：8.5cm（直径23cm）、No.45はA：4cm（直径7.8cm）を測る。このことから、円弧状の断面をもつ研磨面の幅は、約4～8.5cmの範囲であり、昭和52年度の岩本遺跡で出土している磨製石斧の幅の範囲内である。また、研磨面の緩やかな円弧状の断面は、約直径7.8～23cmの円弧であり、今回出土した磨製石斧の刃部片と考えられる磨面をもつ剥片No.40やNo.41の磨面上の円弧や、昭和52年度の岩本遺跡で出土している磨製石斧の断面形態と類似

している。これらのことから、緩やかな円弧状の断面をもつ研磨面は、磨製石斧の研磨を用途として用いられたことに蓋然性があると考えられる。

南九州においては、他地域より早い段階から磨製石鏃の出現が認められている。現在において最古の事例としては、西之表市の奥ノ仁田遺跡<sup>(1)</sup>と熊毛郡中種子町の三角山遺跡<sup>(2)</sup>が挙げられる。いずれも、縄文時代草創期の隆帶文土器に伴うものである。系統的・形態的に縄文時代早期の磨製石鏃あるいは局部磨製石鏃と連鎖があるかは別稿に譲るとしても、南九州における縄文時代草創期・早期には、磨製石鏃が打製石鏃と共に石器組成内に認められることは、他地域と比較して特異な様相のひとつである。

縄文時代早期の磨製石鏃が量的に多く出土した遺跡としては、川辺郡川辺町の鷹爪野遺跡が挙げられる<sup>(3)</sup>。鷹爪野遺跡では、前平式土器に伴い磨製石鏃29点、磨製石鏃の未製品である磨製剥片20点出土している。さらに、磨製石槍、磨製石斧、砥石、台石、磨石、ハンマーストーンも出土している。川辺町教育委員会の上村純一氏のご好意により筆者が実見させて頂いた際の所見としては、頁岩製の不定形剥片を磨製・打製石鏃の共通素材として石核から剥離している。その素材剥片から磨製石鏃への整形段階は、まず、素材剥片の両面を砥石によってほぼ均等な厚さになるように平坦に研磨し、さらにその次の段階として、研磨により側縁を整形することで先端部・基部を作り出している。完成された磨製石鏃の先端部・基部・両側縁の形態は、縄文時代草創期の奥ノ仁田遺跡のものに類似していると考えられる。

各遺跡で出土している磨製石鏃の断面形態によると、それを研磨する砥石にはより平坦な研磨面が必要と考えられる。実際、鷹爪野遺跡から出土している砥石には、現在の砥石と形態的に変わらないような断面四角形のものが認められる。このことから、岩本遺跡から出土している砥石に認められる平坦な研磨面は、磨製石鏃、鋸歯状の切り込みをもつ磨製石器、磨製石槍などの磨製石器類を研磨していたことも推測できる。

また、平坦な研磨面あるいは磨面をもつ石器としては、台石、磨石、石皿<sup>(4)</sup>があり、これらの石器の機能を考えていく上で、磨製石器の一部（より平坦な両面や断面をもつ磨製石鏃、磨製石槍、その他の磨製石器）の研磨具として用いられていることを考慮して、縄文時代の石器組成内容を再検討する必要もあると考えられる。

なお、岩本遺跡から出土した砥石は、断面形態的には類似しているものの、利用石材が異なっており、石材差による利用差の違いがあったことも考えられよう<sup>(5)</sup>。また、固定方法と利用方法についても、実験考古学を含め検討する必要があろう。

以上、先述したとおり、南九州においては、近年の発掘調査で縄文時代早期の研磨技術に関連する石器の出土例が相次いでいる。また、縄文時代草創期の出土資料から、磨製石器の形態や研磨技術の一部が当該期にまで遡れることが看取できると考えられる。また、研磨技術は、後期旧石器時代にはすでに石器製作技術として存在している。これらを踏まえ、南九州における縄文時代早期の研磨技術については、その内容や変遷の様子、各地域での様相に着目して検討していくことが課題として挙げられよう。さらに、鬼界カルデラ噴出物をはさんだ上下の文化層での研磨技術・磨製石器を対比することで、より南九州独自の様相が垣間見られると同時に、下山氏が構築した方法論<sup>(6)</sup>を用いて、火山災害による文化変異のあり方の一部を探ることも可能であると考えられる。

（文責 鎌田）

#### 註

- (1)鹿児島県立埋蔵文化財センター 1996 『小牧3A遺跡・岩本遺跡』
- (2)全国的に見ると、縄文時代草創期から出現している一種の有溝砥石である、いわゆる矢柄研磨器があるが、南九州の縄文時代早期・草創期の遺跡での出土例は認められていない。
- (3)出土資料整理中に、県立埋蔵文化財センターの桑波田武志士より、田代町ホケノ頭遺跡（平成11年度調査）において岩本式土器に伴い磨製石鏃、磨製石斧、砥石が出土していることをご教示頂いた。
- (4)長野真一 1996 『小牧3A遺跡・岩本遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- (5)児玉健一郎・中村和美 1997 『奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡』 西之表市教育委員会
- (6)中村和美 1997 「三角山遺跡」『鹿児島の縄文文化』 国分上野原シンポジウム実行委員会
- (7)上村純一 1998 『鷹爪野遺跡』川辺町教育委員会
- (8)佐原 真 1994 『斧の文化史』考古学選書6 この本文中で、オーストラリアの原住民が石斧を磨いて仕上げている男の写真（31頁 図17）では、橢円形の石皿のような形態の石器で磨いている。石皿中央にある凹面

が、磨製石斧の両面の研磨や刃部（曲刃）の研磨に適しているためだろうか。

(9)市教育委員会では、砥石の利用石材の差異は、例えば、凝灰岩等は荒研ぎ用、砂岩等は仕上げ研ぎ用などの、磨製石斧の研磨段階での利用差を想定している。鈴木道之助氏は、石材と石質によって、荒研・中研・仕上研に分類している。

(10)下山 覚 1997 「災害考古学」の展望：「災害が与える影響度を考察するために（予察）」『HOMINIS』1.  
CRA

<参考文献>

- 鈴木道之助 1994 『図録・石器入門辞典〈縄文〉』 柏書房  
宮田栄二 1994 「縄文早期の磨製石鏃」『南九州縄文通信』No.8 南九州縄文研究会  
宮田栄二 1998 「縄文時代草創期の石器群」『南九州縄文通信』No.12 南九州縄文研究会  
東 和幸 1995 「加工具－鹿児島県内の石斧について－」『旧石器から縄文へ』鹿児島県考古学会・宮崎県考古学会